

亀ヶ崎城跡 発掘調査報告書

1991

山形県教育委員会

かめ さき

亀ヶ崎城跡 発掘調査報告書

平成 3 年 3 月

山形県教育委員会



18・19・6・38 8・7・11 15・1・14 陶 器



23・35・57・49・26 36・63・77 54・60・62 磁 器

序

本書は、平成2年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した亀ヶ崎城跡の調査成果をまとめたものです。

亀ヶ崎城跡は山形県の北西部に位置する酒田市にあります。酒田市は古代から現代にいるまで日本海側の北の玄関口として発展し、江戸時代には北前船の中継地として大いに繁栄し、旧館屋をはじめ数多くの国・県指定等文化財が豊富にあり、近代都市と文化財の調和のとれた街でもあります。

調査では、城跡の中心地に相当する本丸と二の丸を分ける堀跡と土塁跡の一部が発見され、亀ヶ崎城を考えるうえで参考となります。また、唐津・伊万里焼などの陶磁器が出土したことは、日本海文化を象徴とする商業都市酒田の繁栄の一端がうかがい知れます。

遺跡は一度壊してしまえば二度とは元に戻らないものです。埋蔵文化財は私たちの祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産といえます。調査により明らかにされた遺跡は過去の生活の有様を彷彿と再現してくれるものです。祖先の歴史を学ぶとともに愛護し子孫へと保存し伝えていくことが、現代に生きる私たちに課せられた重要な務といえるでしょう。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境作りをすすめるために、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備と調整をはかりながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存であります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねまして、皆様のご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査に御協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申しあげます。

平成3年3月

山形県教育委員会教育長 木場清耕

例　　言

- 1 本書は、山形県教育委員会が平成2年度に実施した県立酒田東高等学校校舎改築工事に伴う「亀ヶ崎城跡」の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成2年5月14日～6月1日まで、延15日間にわたって行った。
- 3 遺跡の所在地は山形県酒田亀ヶ崎一丁目3の60外に所在する。
- 4 調査体制は次のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 事務局長補佐 佐々木洋治　調査班長 佐藤 正俊

　　調査員 水戸 弘美

事務局 事務局長 土門 紹穂　事務局長補佐 斎藤 久子

庶務班長 佐藤 庄一 野尻 侃

主任事務員 新間 純子 實間 秀男 永井 健郎 渋江 正義

- 5 発掘調査にあたっては、酒田市教育委員会・東禪寺防災コミュニティーセンター・県立酒田東高等学校・土木部建築課・教育庁総務課・庄内教育事務所などの関係機関の協力を得た。

- 6 本書の作成は佐藤正俊・水戸弘美が担当した。遺構図・遺物の実測などは水戸が担当し、本文の執筆は両名の協議のうえ、I・III-3・IVを佐藤、II・III-1・2を水戸が分担した。編集は水戸弘美・安部 実が担当し、全体の総括を佐々木洋治が行った。

- 7 本書の凡例は下記のとおりである。

- (1) 本書中の土色については「新版標準土色帖」(小山・竹原1970)を使用した。
 - (2) 掘図中の方位は磁北を示している。遺構の掘図縮尺は1/50、遺物の縮尺は陶磁器 $\frac{1}{4}$ 、土製品・石製品および金属製品 $\frac{1}{2}$ を原則として、各々にスケールを付した。遺物図版は $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{3}$ ・ $\frac{1}{4}$ で採録した。
 - (3) 遺物観察表中の()内の数値は、図上復元による推計値あるいは残存値を示す。
 - (4) 本書中の遺物番号は、実測図・観察表・図版とも共通のものとした。
- 8 調査記録・実測図・出土遺物については、山形県教育委員会が一括保管している。
 - 9 現地調査・報告書作成では、次の方々から種々のご指導と助言を賜った。記して感謝申しあげる。 加藤 稔 佐藤慎宏 小野 忍 尾形與典 矢部良明 高崎光司
宮瀬交二 利根川章彦

目 次

I 調査の経緯	III 遺跡の概観
1 調査に至る経過	1 調査の概要
2 調査の経過	2 検出された遺構
II 遺跡の環境	3 検出された遺物
1 地理的環境	IV まとめ
2 歴史的環境	<参考文献>

挿 図

第1図 遺跡位置図	3
第2図 調査概要図	5
第3図 貞享年中亀ヶ崎城図	6
第4図 遺構概要図	7
第5図 陶・磁器実測図	10
第6図 磁器実測図	11
第7図 土製品外・陶器実測図	12

表

陶器・磁器観察表	13・14
----------	-------

図 版

卷頭図版 陶器 磁器 (カラー図版)	図版 4 陶器 (1)
図版 1 亀ヶ崎城跡遠景 (東から)	陶器 (2)
調査区近景 (東から)	図版 5 陶器 (3)
西辺土塁跡 (南から)	図版 6 磁器 (1)
図版 2 調査区全景 (南東から)	図版 7 磁器 (2)・陶器 (4)
作業風景 (北から)	磁器 (3)
図版 3 堀跡土層断面 (南から)	図版 8 土製品・金属製品外
20—31~34G 土層断面 (南西から)	寛永通宝・貝・木製品
20—40~42G 土層断面 (南西から)	

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

酒田市亀ヶ崎一丁目3番60号外所在の山形県立酒田東高等学校敷地は、中世から近世の城館跡（本丸・二の丸）として周知されている埋蔵文化財包蔵地である。幾多の戦禍を体験した亀ヶ崎城は、商業都市酒田の商品流通経済の要だけではなく、戦略的な拠点として歴史上重視され、変転の歴史を刻んでいる。

今回の調査は、酒田東高の校舎改築工事にともなうものである。調査に先立ち、教育庁総務課・土木部建築課・酒田東高・酒田市教育委員会との協議を重ね、昭和63年の10月と11月に分布試掘調査を実施した。その結果、江戸時代中期の肥前・瀬戸美濃等の陶磁器が多数出土し、一部堀跡を検出した。これに基づいて本丸中心地に相当する校舎改築地区を工事に先立って、記録保存のための緊急発掘調査を平成2年度に実施することになったものである。

2 調査の経過

発掘調査は、委託期間平成2年4月1日から平成3年3月31日まで、現地調査が平成2年5月14日から6月1日まで15日間であった。現地説明会は5月31日、関係機関・各報道関係者を含めて150名の参加者を得て行われた。以下、調査の経過を略述する。

5月14日～5月18日（5日間）

14日器材の運搬、鋤入式（関係機関参考）。14・15日調査区設定（354m²）のための杭打。15～17日重機械（バックホー）による60～70cm表土剥ぎを行う。17日調査区内に2m単位とするグリッド設定、Y軸方向N—38°—E。16～18日重機表土剥ぎと並行して、土層断面や平面の面整理作業。旧校舎の攪乱層から陶磁器等多数出土。

5月21日～5月25日（5日間）

21～23日15～20cm掘り下げて面整理作業を実施。その結果、調査区の中央部から西側にかけて、本丸と二の丸を分ける堀跡上部幅12～14mと、中央部から東側で土塁の一部幅2～2.5mを確認。24・25日調査区中央に幅3mの東西トレンチを設定し深掘りを実施。

5月28日～6月1日（5日間）

28～30日31～42～20Gトンチを約130cm掘り下げ、堀跡中層まで検出確認。30・31日調査区の全景写真等の撮影。31・1日土層断面・平面図・標高測定等の記録作業。1日器材の運搬、残務処理等を行い現地調査を終了する。

II 遺跡の環境

1 地理的環境

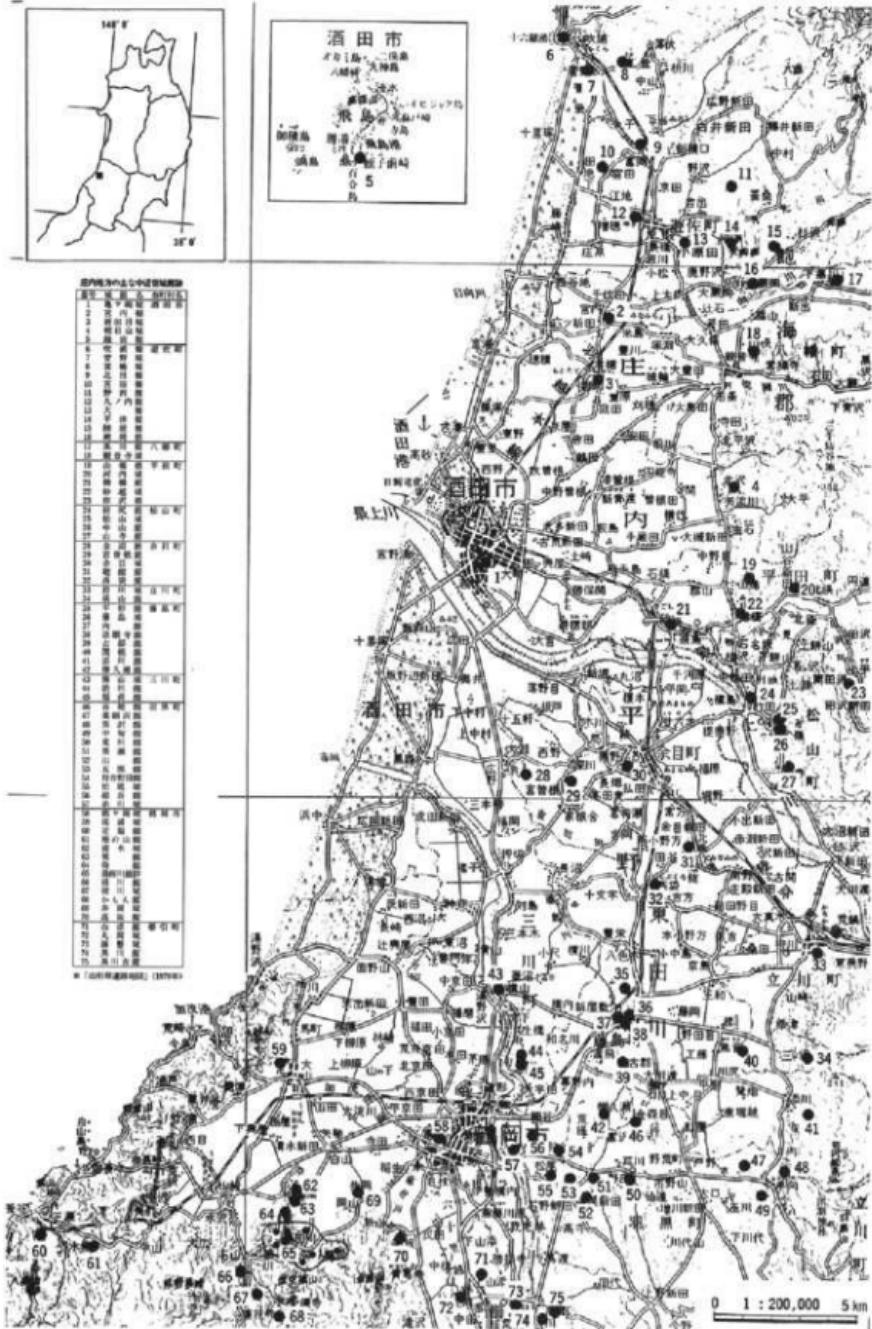
亀ヶ崎城跡は、山形県の北西に広がる庄内平野の西端、日本海に面した酒田市のほぼ中央部（東経139°51'、北緯38°55'）に位置し、標高約3mを測る。庄内平野は、東を出羽丘陵、西を庄内砂丘に狭まれた海岸平野で、日本海の影響を受け、海洋性の気候の特徴を顕著に示している。酒田市付近は、三角州の低地になっており、吾妻・奥羽山脈を水源として山形県を南から北西に流れる最上川が、氾濫原を形成しながら横断している。その氾濫原平野の自然堤防上に亀ヶ崎城は構築されている。南の最上川と西の新井田川が、城の南西で合流し日本海に注ぎ、東には湿地が控えて要害になっている。亀ヶ崎城は、自然地形を巧みに利用し水城的性格を持ち合わせ、要地酒田の城として十分機能を発揮した。

2 歴史的環境

最上川河口にある酒田市は、その地勢から、出羽国の湊町として発達した。酒田市城輪には、平安時代の出羽の国府跡と推定される国指定史跡城輪柵跡があり、はやくから中央政府との交流がなされ、一定の文化圏が存在したと考えられる。群雄割拠の戦国時代には、酒田も東北有数の湊町として堺のような自治都市の機能を有したが、織豊時代に否定され、酒井家入部の頃には幕府・藩の行政機構に組織されていた。その後、亀ヶ崎城が庄内藩の支城になると、酒田は城下町としてよりも、湊町として栄え発展し、明治維新を迎えるに至った。有数の穀倉地帯である庄内平野を控え、出羽国内外の商品流通の拠点となった商業都市酒田は、施政上も重要視された。以下、簡略にまとめた亀ヶ崎城の歴史がそれを物語っている。

亀ヶ崎城の変遷

- 不祥　いまの酒田市四ヶ興野付近に大淨山東禪寺と称する真言宗の寺が建つ。
一勢力闘を形成し、東禪寺城または酒田城と呼ばれる。長は東禪寺氏または酒田氏。
- 1466 文正1 越佐大橋城主佐氏が、東禪寺氏を攻める。越佐太郎繁元、東禪寺城主となる。
前後して、東禪寺城、大洪水に押し流される。
- 1467 文正2 応仁の乱はじまる。（～1477）
- 1478 文明10 繁元、東禪寺城を現在地県立酒田東高等学校敷地に移築したとされる。
- 1512 永正9 東禪寺合戦。大宝寺武藤氏と砂越氏が東禪寺城で戦い、武藤氏敗れる。
- 1538 天文7 武藤晴時、東禪寺城と砂越城を攻め川北を治める。東禪寺氏滅び武藤氏一門を以て繼ぐ。
- 1582 天正10 本能寺の変。国内再び無統制。
- 1583 天正11 武藤老臣前森藏人、最上義光と通じ尾浦城を攻め、武藤義氏自刃する。
前森藏人、東禪寺城主となり、東禪寺城主筑前守を名乗ったとされる。



第1図 遺跡位置図

- 1584 天正12 義氏の弟武藤義興、上杉景勝と結び庄内統制に努める。
上杉・武藤氏と最上・東津守氏の庄内争奪の様相強まる。
- 1587 天正15 東津守筑前守が反乱。尾瀬城落城、武藤義興自刃する。
- 1588 天正16 景上義光と伊達政宗の対立深刻化。上杉方の本庄繁長、庄内に進攻。
十五里ヶ原の合戦。東津守筑前守討死。繁長、東津守城に入城。武藤義興の跡目で繁長の二男、武藤義勝、出羽国守となる。庄内は実質、上杉支配下となる。
- 1590 天正18 秀吉の命で上杉景勝、出羽国内の検地を開始。
- 1591 天正19 秀吉、本庄繁長・武藤義勝の所領没収、上杉に与える。東津守城代に河村彦左衛門。
- 1599 康長4 志田修理亮義秀、東津守城主となる。川村兵蔵、平城としての東津守城を整備する
- 1600 康長5 関ヶ原の戦。関ヶ原出羽合戦もはじまる。
- 1601 康長6 景上義光、上杉配下の東津守城を攻め庄内を削る。亀ヶ崎城主3万石に志村伊豆守。
- 1603 康長8 徳川家康征夷将軍となる。義光、東津守城を亀ヶ崎城、大宝寺城を鶴ヶ岡城に改称。
- 1611 康長11 亀ヶ崎城主志村伊豆守没する。九郎兵衛光惟、鶴ヶ岡方に斬殺される。
- 1614 康長19 景上義光没する。九郎兵衛光惟、鶴ヶ岡方に斬殺される。
- 1615 元和1 徳川秀忠一国一城の制を定める。庄内では、鶴ヶ岡城と亀ヶ崎城の二城が特に許される。
- 1622 元和8 最上氏改易される。酒井忠勝、庄内に入部(14万石)。鶴ヶ岡城を本城、亀ヶ崎城を支城とする。亀ヶ崎城代に忠勝の叔父松平基三郎が当たる。町奉行1名物頭2名平士20名。このころから、亀ヶ崎城三の丸は、侍屋敷が取り壊され、町割に組み込まれる。
- 1672 寛文12 前年の東通り航路開発に続き、最上幕領米が西通り航路で初出船する。
- 1713 正徳3 『綱年私記』に、この年、酒田城代屋敷建つの記録がある。
- 1868 明治1 戊辰戦争(～1869)。庄内藩主酒井忠篤開城降伏。酒田に軍務官出張所、民政局を設置。
- 1871 明治4 唐藩置県。酒田は大泉県を経て酒田県となる。
- 1880 明治13 城内建物を民間に払い下げる。その後建物を取り壊し畑地とする。
- 1920 大正9 県立酒田中学校敷地となる。(現在の県立酒田東高等学校)

参考文献

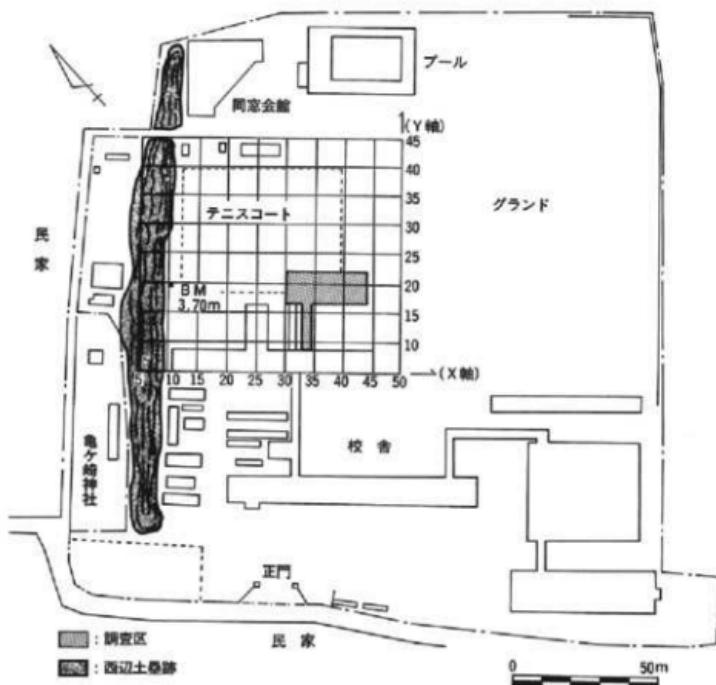
- 安部親任 1866 「筆遺稿」上巻 鶴岡市資料篇 荘内史料集2 鶴岡市史編纂会(1977)
- 佐藤祐室 1981 「日本城郭大系」第3巻 山形県酒田市 新人物往来社
- 下中邦彦編 1984 「やきもの事典」 平凡社
- 竹内順一外 1984 特別展「江戸のやきもの」図録 対談法人五島美術館
- 梶原洋介 1985 「東北大隈文化財調査年報」1 東北大隈文化財調査委員会
- 鈴木公雄外 1985 特集「江戸時代を掘る」「季刊考古学」第13号 雄山閣出版
- 小田静夫外 1988 「東嶽山寛永寺圓因院」一部立上野高等学校改築に伴う第一次調査概報一部立上野高等学校遺跡調査会
- 森本伊知郎外1988 「白金館址遺跡」I 白金館址(特別養護老人ホーム建設用地)遺跡調査会
- 〃 1988 「白金館址遺跡」II 白金館址(亜東開発協会東京弁事所公舎等建设用地)遺跡調査会
- 原田大介 1988 「旧芝離宮庭園」一波松町駅高架歩行者道架設工事に伴う発掘調査報告書—旧芝離宮庭園調査團
- 森本伊知郎外1989 「白金館址遺跡」III 一研究編— 白金館址遺跡調査会
- 阿部明彦外 1989 「分布調査報告書」(16) 山形県教育委員会
- 船越行義外 1989 「酒田市史」改訂版別巻 酒田市史編纂会

III 遺跡の概観

1 調査の概要

現在の亀ヶ崎城跡は、南北170mに渡り、高さ約2m50cmの本丸西辺土塁が姿をとどめ、約250年の大権が茂っている。城跡周辺は宅地となっているが、酒田東高正門前の南に傾く地形や、堀の区画に沿うような道路、袋小路等が、当時を偲ばせている。

今回の調査区は、酒田東高敷地の中央部で、テニスコート南端と水の濱む湿潤地が対象となった。改築校舎の計画に基づき、グリッド基準線を設け、一単位2mとしてX軸Y軸各々算用数字で記し、Y軸方向N-38°-Eとした。表土・整地層約60cmを重機械で剥ぎ取った後、土層観察をしながら掘り下げ、面整理を行ったが、旧校舎による攪乱が非常に激しい状態であった。特に西側調査区の攪乱層からは、木片や瓦と共に遺物が多量に出土している。地表から約1mの深さで堀跡上部を確認し、さらに調査区中央東西に、幅3mのトレンチを設定、堀跡の検出を行った。

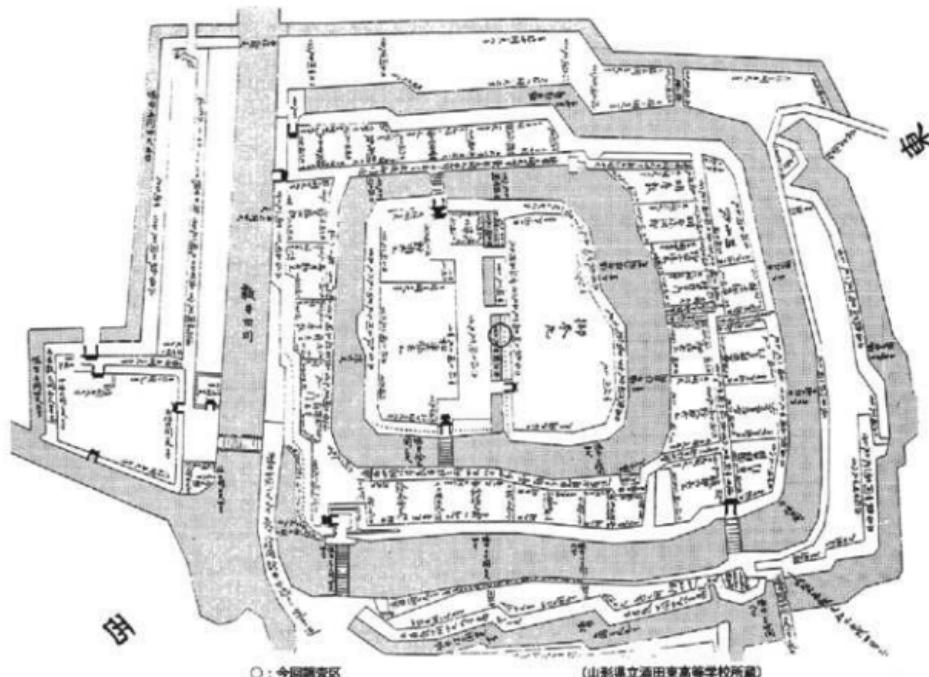


第2図 調査概要図

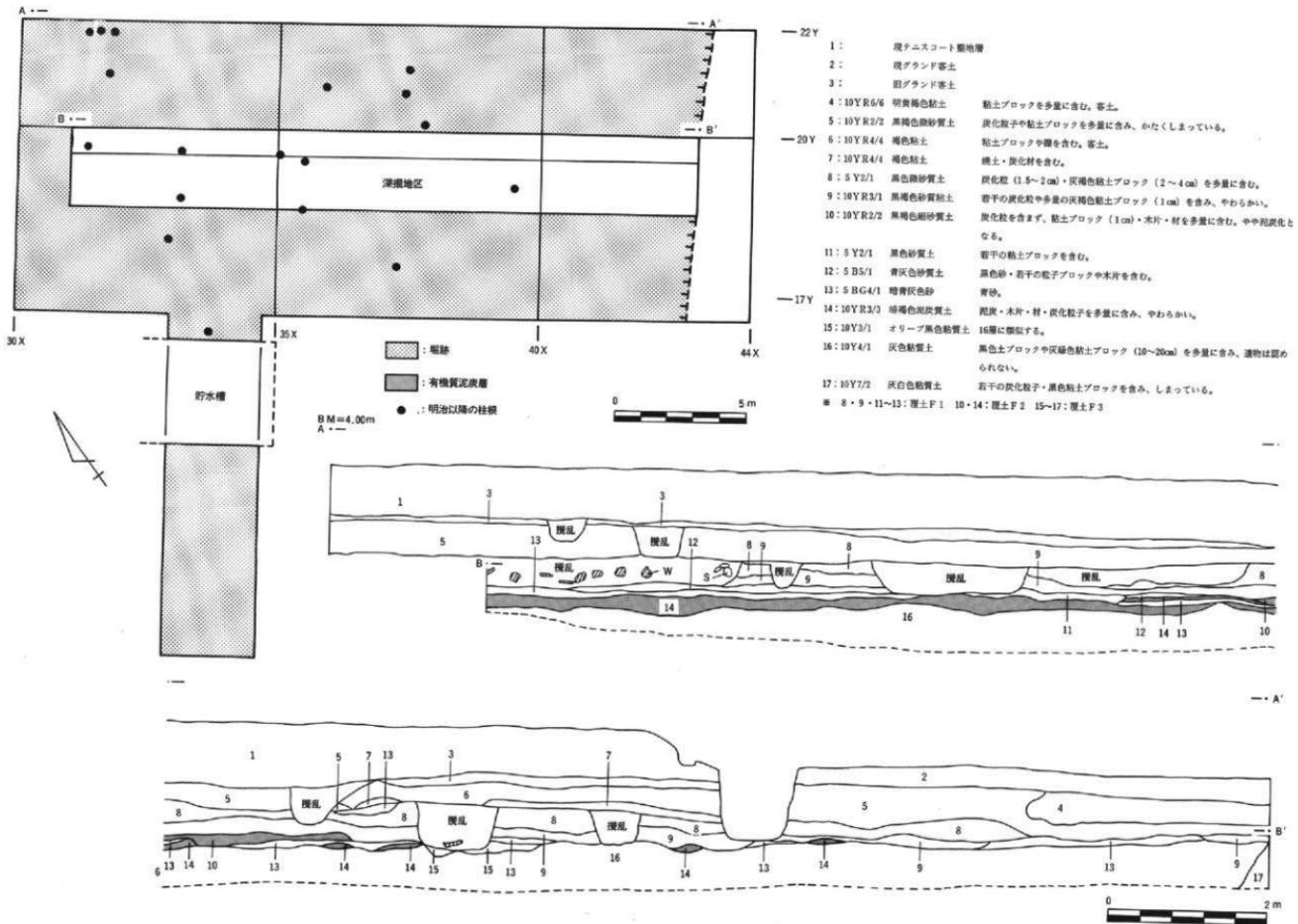
2 検出された遺構

亀ヶ崎城の二の丸と本丸は、堀によって隔てられ、相対する巴形をしていた。今回の調査では、その堀跡の一部を検出した。堀の規模や内容は、限られた調査のため不明である。

堀跡は、8層上面で確認し、覆土は、F1砂質土(8・9・11~13層)、F2泥炭(10・14層)、F3粘質土(15~17層)に大きく分層できる。17層が土壘盛土の崩れたものと観察され、調査区外の東側に、堀の立ち上がりがあると考えられる。粘質土は、粘土ブロックを含み、人為的に埋められた状態を示している。さらに、泥炭層が西半分において、東から西に流れ込むように堆積していることから、埋め戻された後、一定期間西側がくぼ地状になっていたことが分かる。その間廃棄された陶磁器などの日用雑器が、集中してこの層から出土している。砂質層は、泥炭層を覆うように自然堆積しており、両者には時間の差が見られるが、遺物にはそれが認められなかった。土層観察と出土遺物より、堀は、18世紀代に土壘を壊し埋め戻され、くぼ地状となり、その後自然堆積し、明治以降整地され現在に至ったものと判断される。



第3図 貞享年中亀ヶ崎城図（1684～1687年）



第4図 遺構概要図

3 検出された遺物

今回の調査で出土した遺物は、本丸と二の丸を分ける堀割から検出したもので、整理箱に15箱出土、その内90%は陶磁器の碗・皿・鉢等の製品である。陶磁器の年代は、全般的な傾向として18世紀中葉から19世紀前・中葉にかけて製作されたと考えられる製品が主体を成し、それ以前の時期に製作されたものは少ない。産地は、肥前の製品を中心に瀬戸美濃・萩や他地域で製作されたと推定されるものが多く含まれている。また旧校舎の建築・解体時の壊乱層からは19世紀末から20世紀に至る瓦をはじめとする製品も出土している。なお、個別の陶磁器の詳細は「陶器・磁器観察表」を参考に、この項は概括するものである。

陶 器 (第5・7図 卷頭図版 図版4・5)

碗 1・2・21は唐津産で、1は内外面とも刷目文を施し見込に釉剝がある。2は高台脇から丸腰でほぼ直立しやや深い碗。21は半筒形を示し灰釉施釉、唐草文を施文する。38は口縁部が外反し、瀬戸美濃産の柳茶碗の高台と類似し厚手で下方を開いている。年代は18世紀から19世紀前半に製作されたものが多い。

皿 15が瀬戸美濃産、22が不明である外は唐津産である。17世紀前半から18世紀前半にかけては高台ではなく、17世紀後半以降のものは高台を有する。7・8は胸部が屈曲する折皿状の形を示す。12・14・15は見込みに蛇ノ目の釉剝が施れ、その大半は灰釉施釉。

鉢 18・19は口縁が大きく屈曲、外反し、体部内面に象嵌で三島手文を施文する唐津産である。17・18瀬戸美濃産で、17は見込みが蛇ノ目の釉剝で鉄・緑釉の掛分である。

蓋 17世紀前半の3・5は内側に糸切痕がみられ、19世紀の4・6は宝珠状のつまみを有しかえりのある蓋。6は外面に刷目文を施す。その外土瓶・徳利・花器等が出土する。

磁 器 (第6図 卷頭図版 図版6・7)

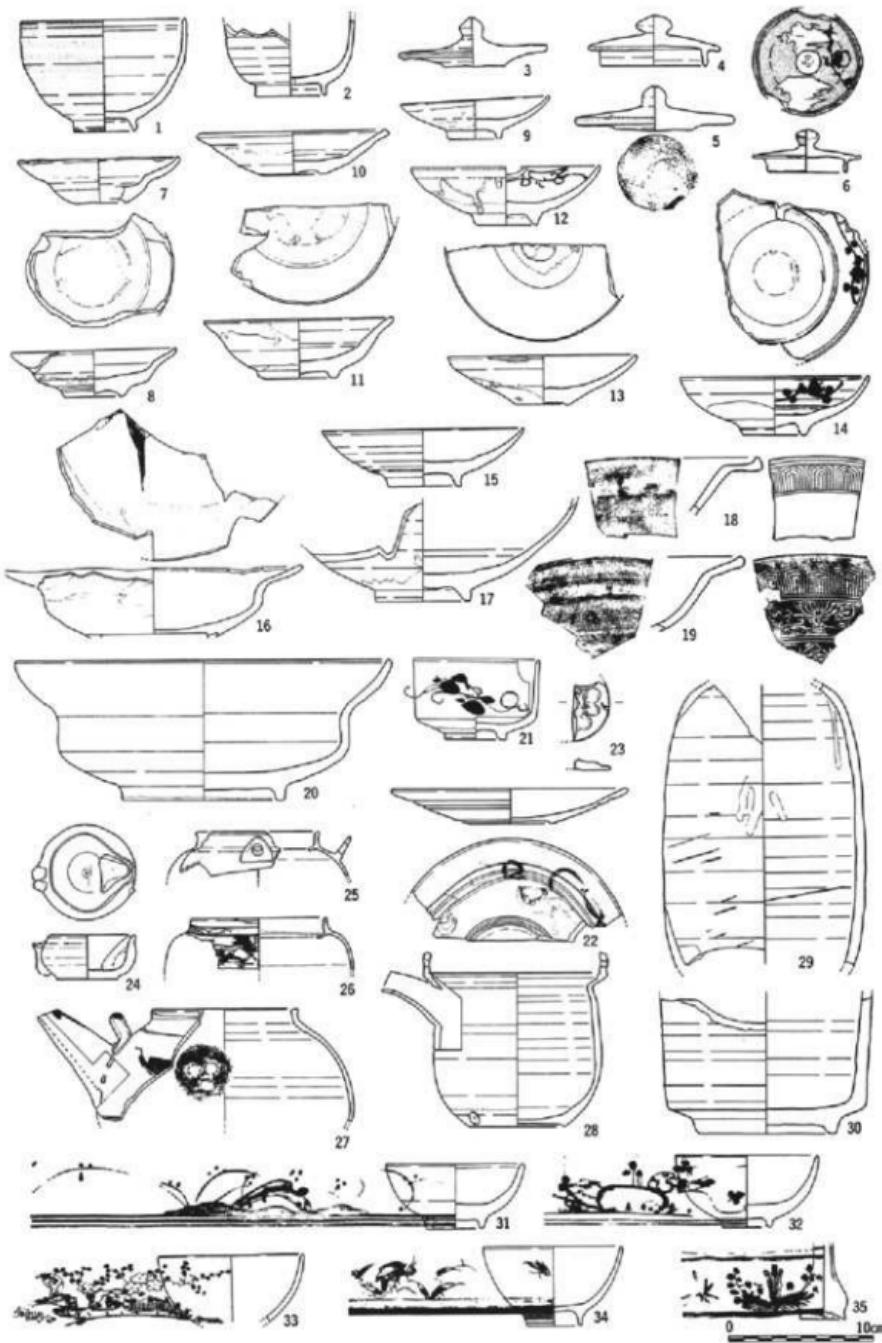
碗 36は萩の産地で「く」字屈曲になる平碗で、その外は肥前産である。31・32・39は「くらわんか茶碗」で胸部から高台脇まで厚手である。37は全体に厚く「御茶室碗」のようである。39~41は網目文を、42竹梅・43草花・44人物・45老松等の文様を施文。42の胸部から直立や45の腰部が丸腰で外反するものもある。48は高台が高い「広東碗」である。

皿 産地は肥前である。57は赤絵が施され、形態は63・64の輪花皿、59・60菊花皿、腰部が丸腰になる54・56等がある。9・59は高台がやや高く高台脇から外反しやや厚手。

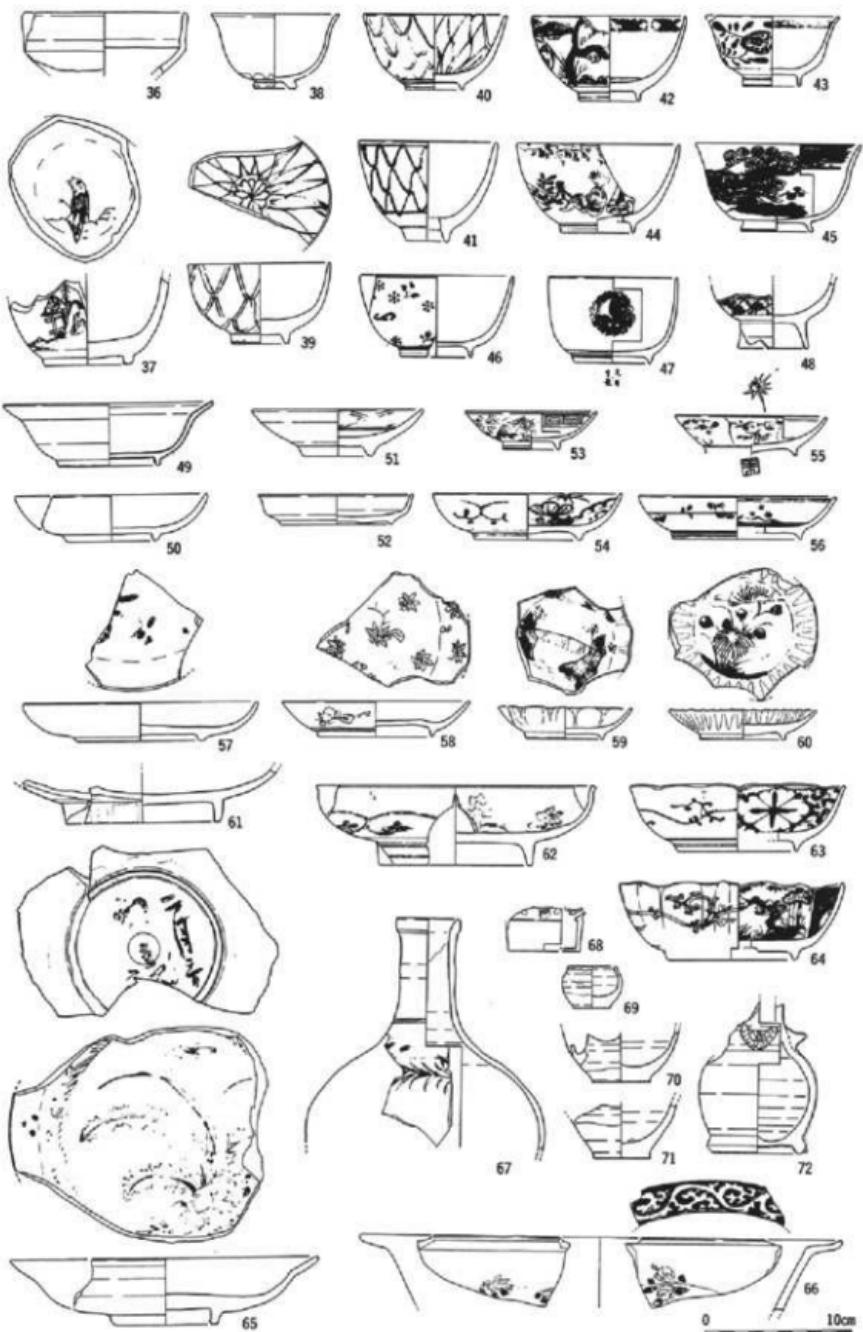
鉢 年代は17世紀代で、肥前産である。62は腰部が丸腰で高台が高く、唐草文が施文。65は胸部が屈曲し大きく外反し、内面全体に草花文を施す。

土製品外 (第7図 図版8)

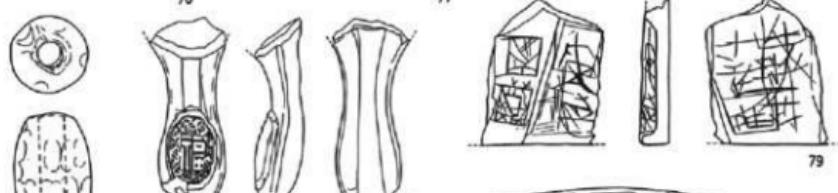
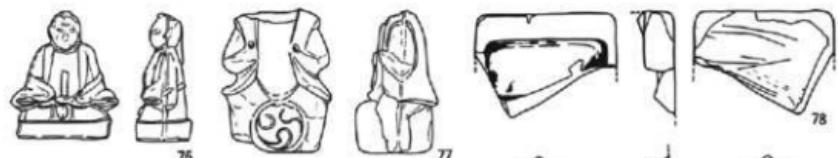
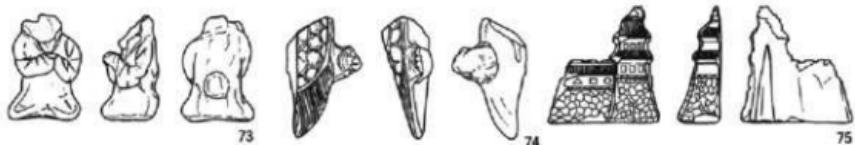
磁器質の73や陶質の74~76は小形で、人形・動物・城などの置物類である。80は土鍤、81は急須土把である。78・79は硯で裏面に線刻を施す。煙管吸口82、簪83等が出土する。



第5図 陶・磁器実測図



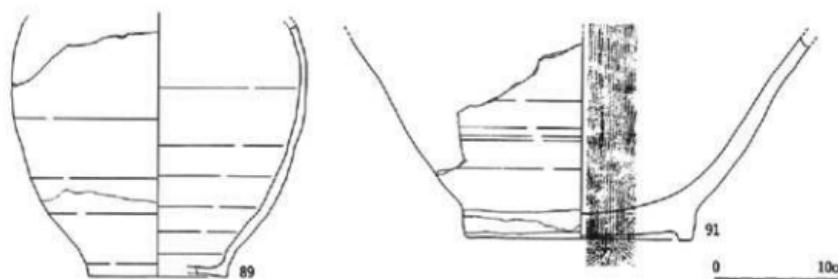
第6図 磁器実測図



0 5 cm



84



0 10 cm

第7図 土製品外・陶器実測図

陶器・磁器観察表

No.	種別・器種	出 土 級	形 狀・寸 法	形 狀 の 特 徴	文 標・施 装・色 調 等	產 地・年 代
					寸 法	形 狀
1	陶器・瓶	22-22-F 2	11.4×4.3×7.6	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。外腹は白土色で斜面は赤土色である。	西・北 32C前半
2	陶器・瓶	28-28-F 2	8.9×4.8×(5.1)	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。外腹は白土色で斜面は赤土色である。	西・北 32C後半-33C
3	陶器・瓶	25-21-F 2	10.5×—×3.4	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
4	陶器・瓶	24-20-F 1	9.2×—×3.6	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
5	陶器・瓶	28-19-F 1	11.1×—×3.1	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
6	陶器・瓶	30-21-F 1	7.6×—×3.1	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
7	陶器・瓶	29-20-F 1	11.2×(3.5)×3.1	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
8	陶器・瓶	28-28-F 2	11.1×3.8×3.2	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半-33C
9	陶器・瓶	31-22-F 1	10.3×3.7×3.0	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半-33C
10	陶器・瓶	32-20-F 2	12.4×4.2×3.1	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半-33C
11	陶器・瓶	37-18-F 1	13.9×5.3×4.1	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半-33C
12	陶器・瓶	34-29-F 2	15.1×4.3×4.1	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
13	陶器・瓶	33-20-F 2	13.4×4.0×3.4	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
14	陶器・瓶	34-21-F 1	15.4×4.4×4.1	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
15	陶器・瓶	34-20-F 2	14.5×4.0×4.9	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
16	陶器・瓶	34-20-F 2	(20.6)×(3.9)×(4.3)	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
17	陶器・瓶	31-22-F 2	(21.3)×6.4×(6.0)	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
18	陶器・瓶	31-22-F 1	20.4×—×—	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
19	陶器・瓶	32-20-F 1	13.5×—×—	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
20	陶器・瓶	31-20-F 1	25.8×11×9.7	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
21	陶器・瓶	31-18-F 1	8.8×4.4×5.6	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
22	陶器・瓶	30-29-F 1	16.5×5.4×2.4	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
23	陶器・瓶	33-21-F 1	4.0×—×5	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
24	陶器・印良瓦	31-21-F 1	6.4×4.2×3.1	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
25	陶器・土瓶	31-21-F 1	8.8×—×(3.40)	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
26	陶器・土瓶	33-22-F 1	9.3×—×(3.5)	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
27	陶器・土瓶	31-21-F 1	10.0×—×(7.40)	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
28	陶器・土瓶	30-22-F 1	17.7×6.4×11.9	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
29	陶器・毛利	21-20-F 1	12.0×(12.0)×(19.0)	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
30	陶器・花器	21-21-F 1	(14.0)×4.7×(19.2)	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
31	陶器・瓶	31-20-F 1	9.5×3.8×4.5	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
32	陶器・瓶	31-20-F 1	9.8×3.4×5.0	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
33	磁器・瓶	33-19-F 1	10.0×(5.2)×(4.7)	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半-33C
34	磁器・瓶	32-20-F 2	8.6×3.7×5.5	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半-33C
35	磁器・五瓣口	35-19-F 2	(1.4)×3.2×(5.80)	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
36	磁器・瓶	33-21-F 1	11.0×(4.8)×(4.40)	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
37	磁器・瓶	34-22-F 1	10.6×5.4×(5.7)	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
38	陶器・瓶	30-21-F 1	8.0×2.8×5.6	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
39	磁器・瓶	31-18-F 1	9.0×3.9×5.4	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
40	磁器・瓶	34-20-F 2	9.0×4.5×3.8	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
41	磁器・瓶	37-20-F 2	9.4×3.0×7.6	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
42	磁器・瓶	34-20-F 1	10.5×4.2×5.8	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
43	磁器・瓶	30-20-F 1	9.2×4.5×4.7	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
44	磁器・瓶	31-17-F 1	11.2×3.0×6.3	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
45	磁器・瓶	30-21-F 1	11.5×5.0×6.2	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
46	磁器・瓶	31-17-F 1	10.0×5.0×5.5	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
47	磁器・瓶	34-19-F 1	9.0×3.5×5.8	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
48	磁器・瓶	32-22-F 1	(2.0)×4.5×(4.2)	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
49	青磁・瓶	30-21-F 1	14.6×7.3×4.4	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
50	磁器・瓶	32-21-F 1	13.2×4.0×5.2	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
51	磁器・瓶	31-20-F 2	11.0×4.8×3.3	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
52	磁器・瓶	30-20-F 2	10.6×7.2×2.1	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
53	磁器・瓶	30-21-F 1	9.2×3.9×2.7	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
54	磁器・瓶	33-21-F 1	12.8×7.4×3.2	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
55	磁器・瓶	30-20-F 1	10.5×(6.2)×(2.7)	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
56	磁器・瓶	31-20-F 1	12.6×8.8×2.9	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
57	磁器・瓶	30-19-F 2	16.8×8.8×2.7	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半
58	磁器・瓶	30-21-F 2	13.9×8.8×2.5	側面に斜めな凹部、直腹の尖らが付属した丸底。	内面は赤土色で斜面は白土色である。	西・北 32C後半

No.	種別・器種	出 土 区	出 口・面積・厚 級	形 種 の 特 徴	文 標・施 装・色 調 等	産 地・年 代
59	磁器・皿	31-29-F 2	9.2 × 9.3 × 0.2	直筒から外反し、縁部で内凹になつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面に朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
60	磁器・皿	33-29-F 2	10.2 × 5.8 × 2.1	直筒から外反し、縁部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
61	磁器・皿	31-26-F 1	(18.4) × 10.4 × (3.5)	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
62	陶器・鉢	32-23-F 1	19.4 × 19.8 × 9.4	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前・南宋
63	磁器・皿	31-19-F 1	14.8 × 8.2 × 4.9	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
64	磁器・皿	32-20-F 1	15.4 × 8.3 × 5.5	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
65	磁器・皿	35-20-F 2	21.3 × 7.1 × 4.7	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
66	磁器・皿	30-22-F 1	33.2 × (25.2) × (4.10)	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
67	磁器・花瓶	30-29-F 1	4.3 × (15.3) × (16.40)	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
68	磁器・花瓶	33-20-F 2	— × 2.5 × 2.9	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
69	磁器・直筒	33-23-F 1	2.4 × 2.5 × 2.9	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
70	磁器・直筒	33-18-F 1	(3.0) × 2.9 × (2.30)	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
71	磁器・直筒	30-29-F 2	(5.7) × 2.8 × (2.40)	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
72	青磁・直筒	33-29-F 1	(11.0) × 6.2 × (10.20)	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
86	陶器・灰皿	30-29-F 1	(12.4) × — × —	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
87	陶器・灰皿	33-22-F 1	(20.2) × 16.6 × (8.22)	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
88	陶器・手盆	33-18-F 1	(21.0) × 18.8 × (3.70)	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
89	陶器・盤	32-22-F 1	(23.4) × 11 × (2.0)	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
90	陶器・罐	31-19-F 1	— × — × —	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前
91	陶器・罐	33-22-F 1	(35.8) × 18.2 × (15.30)	直筒から外反し、直筒部に突出をもつて、口縁部が丸めで、下方に斜溝がある。	内面は朱色の墨書き。外側はやや赤褐色の色調。器底から落葉が付着。	肥前

IV まとめ

調査は平成2年度に実施された山形県立酒田東高等学校の校舎改築工事に先立って行った緊急発掘調査である。調査の期間は、平成2年5月14日から6月1日までの延15日間に亘り、調査の面積が354m²を数える。

今回の調査は、亀ヶ崎城跡の本丸との二の丸とを分ける堀割を検出したもので、近世初期以前の遺構や遺物は確認されなかった。検出された堀跡は、土層の堆積状態を観察すると、調査区の中央部から西側にかけて堆積する中層の有機質泥炭層を境として、上層部と下層部では土質の状況に相違がみられる。上層部は、黒褐色・褐色の微砂質粘土、有機物や炭化材を含む腐蝕土で、上層から中層にかけて遺物も多量に出土する。下層は、灰褐色・灰白色の重粘土で黑色粘土ブロックが混り、遺物の出土は希薄である。このことは出土した陶磁器の製品および「貞享年中亀ヶ崎城図」に土塁・堀跡が存在することから観察すると、多少の時期差があるものの恐らく18世紀前半から18世紀中頃において、土塁を壊して堀へ埋め立てたと推察され、その後は日常雑器等の廃棄場所として堀の存在があったと考えられる。なお、堀跡の幅や深さ等の規模は限定された調査区のため不明確である。

出土した遺物は、その大半が陶磁器の製品である。産地はほぼ90%は肥前であり、ほかに瀬戸美濃・萩や周辺地域で製作されている。年代は、17世紀前半の陶磁器の皿・鉢・蓋等少なく、主流を占めるものは17世紀後半から19世紀前半や幕末期にかけての碗・皿・鉢・蓋等の製品である。

調査は、堀跡の一部が対象となつたに過ぎないが、江戸時代中期から幕末期にかけての亀ヶ崎城内の生活の様相が明らかになったものである。本書が今後の県内における江戸時代遺跡研究の一助になることを願つて止まない。

図 版



亀ヶ崎城跡遠景（北東から）



調査区近景（東から）



西辺土壘跡（南から）

図版2



調査区全景（南東から）



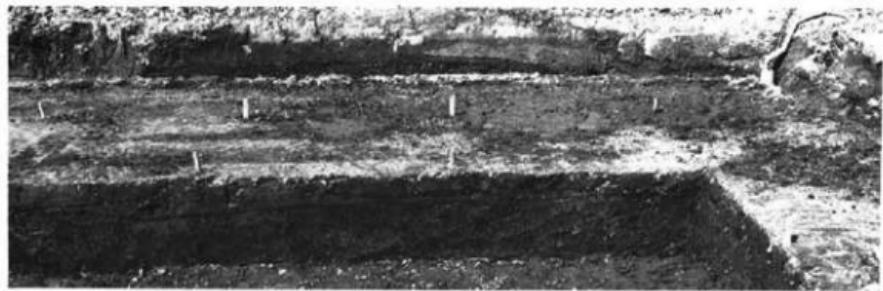
作業風景（北から）



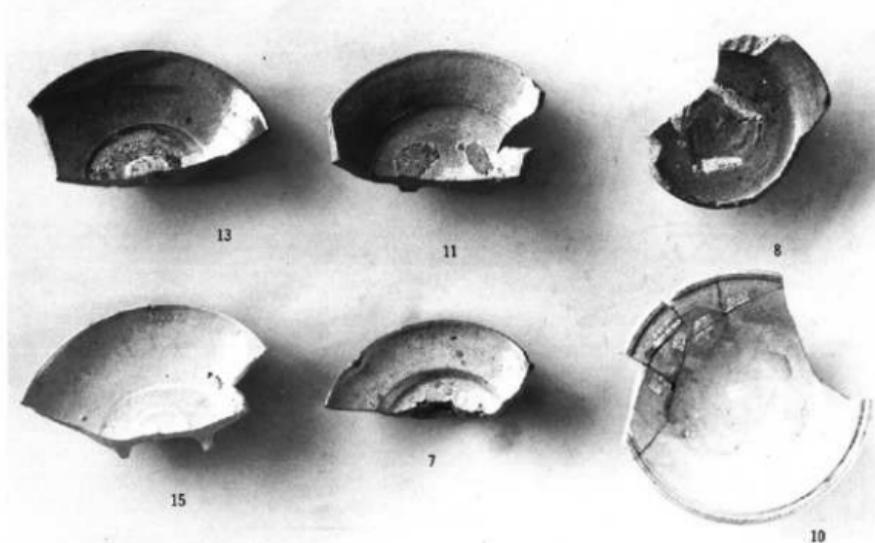
壇跡土層断面（南から）



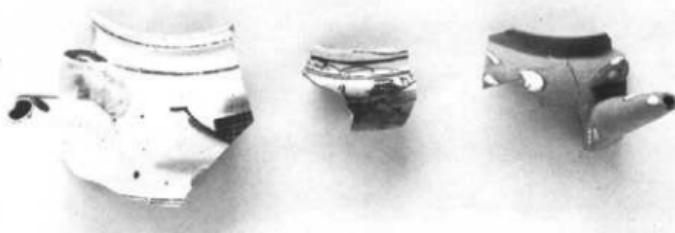
20—31～34 G 土層断面（南西から）



20—40～42 G 土層断面（南西から）



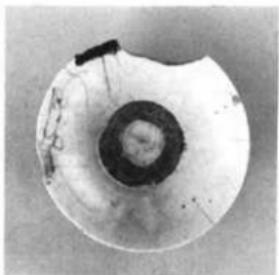
陶器（1）



陶器（2）



24



12



28



2



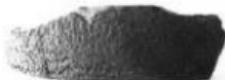
20



30



22



88



87



90



29



91



89



31



32



48



33



34



9



56



40



37



64



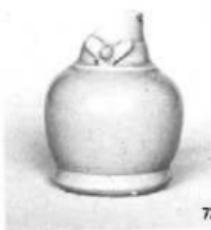
36



35



65



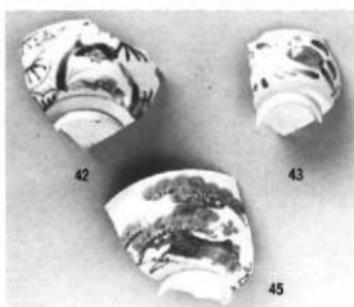
72



39



40



67



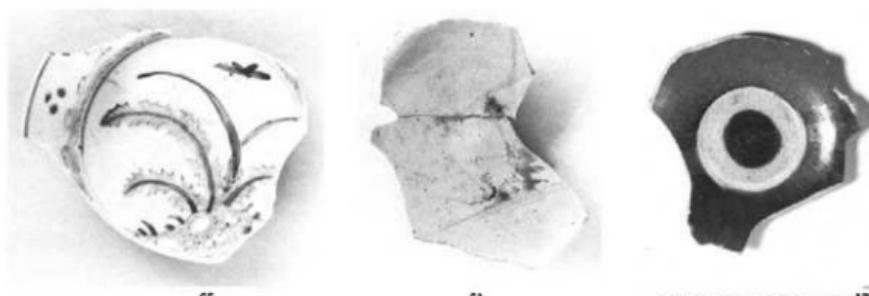
41

46

44

47

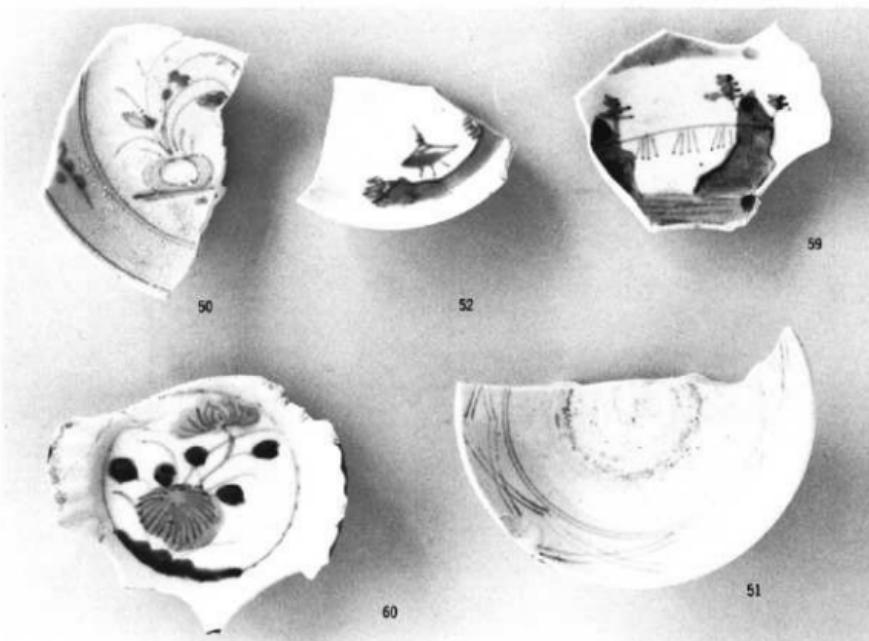
45



55

61

磁器 (2)・陶器 (4) 17



50

52

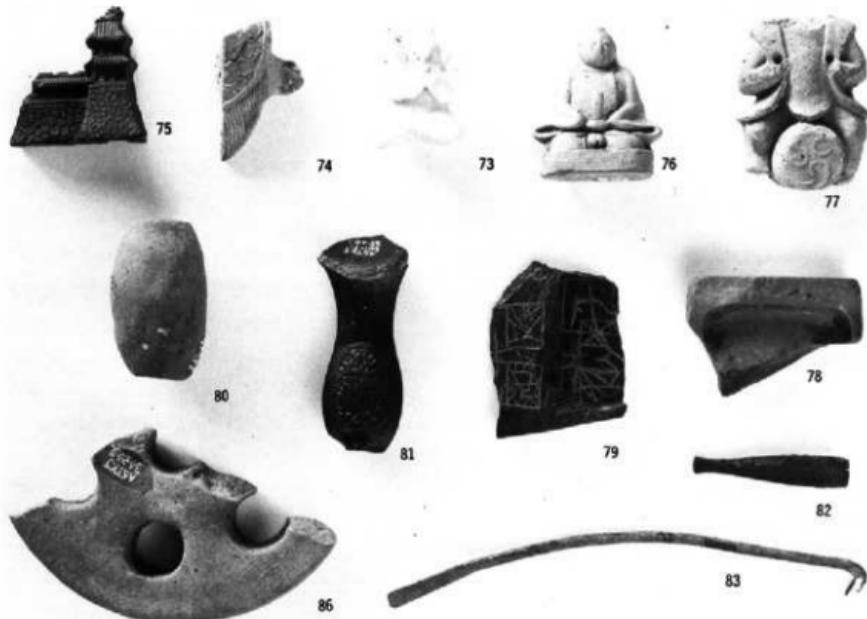
59

60

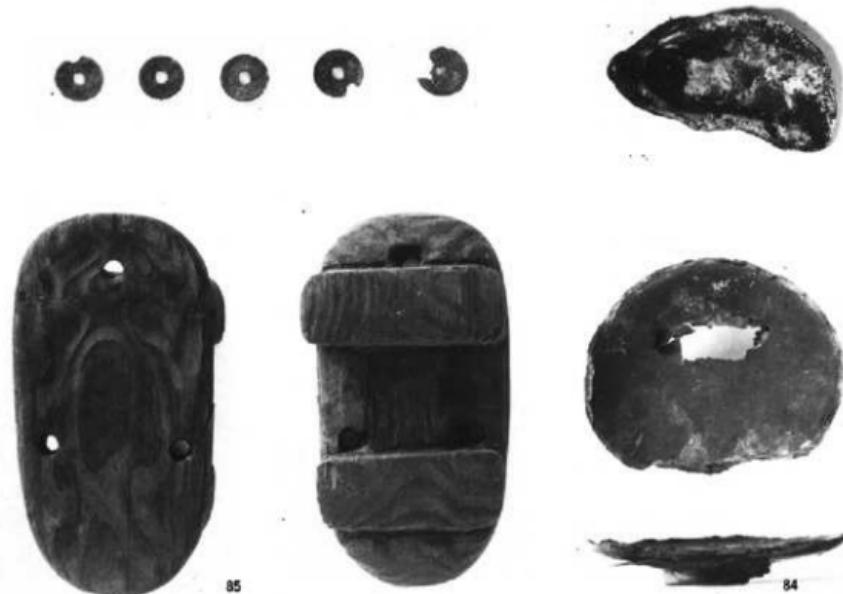
51

磁器 (3)

図版 8



土製品・金属製品外



寛永通宝・貝・木製品

山形県埋蔵文化財調査報告書第169集

かめ さき
亀ヶ崎城跡

発掘調査報告書

平成3年3月15日 印刷

平成3年3月20日 発行

発行 山形県教育委員会
印刷 大塙印刷株式会社
